

白い血？！

血液を電子顕微鏡で見ると数多くある赤血球の中にまさに白い血「白血球」があることがわかります。

さて、『白い血』で発想されるのは白血病でしょう。これは、19世紀半ばにドイツの病理学者ウィルヒョウが「血液が白っぽくなって死亡した」と報告したことが語源とされています。

ところが、白血病細胞（白血球）が極端に増えても、実際には血液が白っぽいと眼で見えてわかることはなく、通常は濃い赤色から灰白赤色になるだけでほとんどの白血病患者の血液の色は赤いままなのです。

